

日本海 SeaKayak No.2

7/24の第一回のツアーから、2週間が経ち夏も本番となり定番通りに日々の気温が上昇している。・・・にも関わらずに日中炎天下での仕事は非常にこたえるものがある、3~4Lの水分補給してもトイレには一度も行かないくらいにその摂った水分も体外に放出されている、ストレスもピークに達している。その葛藤をいやすために第2回の日本海ツアーである。



1999.8/8

晴れ

メンバー

加藤一雄 51才

大塚賢一 44才

灼熱の太陽、したたり落ちる汗、気温も有に30度は遙かに上っている。すべてが同じものであるのにこうも違いがあるのか！。

灼熱の太陽がまぶしく、落ちる汗が気にならず、30度以上の炎天下でも口には言い表せないくらいに快適である。

文字通りに葛藤という空間が濃い緑、澄み切った海、素晴らしい青空に埋め尽くされて心が洗礼され充実感を取り戻した一日であった。



8:00 にあのNHKの朝ドラで有名な「ふたりっ子」のロケ現場である、鑑浜を西方面に出廷する。

15分も漕ぐと1986年12月28日に強風にあおられて大惨事の事故で死者6名が出たあの「余部鉄橋」が目に入ってきた。私は実際に見るのは初めてである。あんな高いところから落ちるなんて事は信じがたいことである。地形を見ると、確かに余部の浜が風の吹き溜まりになってはいるのだが・・・、二度とこのような大惨事がないように願うばかりである。



余部鉄橋を背に

今日のコースの最北端の伊笹岬を回り込む。やはり外海に面してか波も1mくらいのうねりになって、波の谷間に入ったらパディーの加藤氏が頭だけしか見えなくなることもある。

海岸線を見渡すと、やはり日本海の荒波に削られて岩肌にとんでもなく大きな穴がポッカリ口を開けているものや、小さな洞窟が無数に



洞窟に吸い込まれる

抜けてはいるのだが、カヤックが通れそうもないほど狭い。この洞窟の長さは150mくらいはあるだろうが、一般の船では絶対に入ることが出来ないだろう。

この中で潜ったら10



海に浮かぶ盆栽



日本海の夫婦岩

ある。大きな洞窟では、その名も「釣鐘洞門」と名が付けられている。早速に散策の開始である。非常に奥が深く電気がいるくらいに暗闇である、コウモリでも出てきそうで不気味である、奥は

年もののアワビがいるいかも?・・・しかし、海の中も真っ暗で不気味そのものである。

いよいよ国定公園に定められている御火浦(みほのうら)海岸の散策である。しかし、この一帯に入るとどうも漁師の舟

大島



色に陶醉しながら漕いでいると、地図の目測を誤ってしまい、天然記念物の「大島」まで来てしまった。ここにも小さな漁村がある・・・と、言っても目に映るのでは10軒ほどであろうか、こぢんまりとした雰囲気である。この大島には江戸時代に建てられたものであろうか、厳冬期の強烈な波にも負けずに、ボロボロになりながらも威風堂々として建っている石の鳥居が印象的であった。ここまでの時間は約2時間ほどかかっている。

大島で折り返して上陸ポイントを探す、なかなかこの海岸は砂浜が見つからない。砂浜があると思えば小さな入り江になって水面が少々汚れていて海中を見れば小さな水クラゲがウヨウヨと海中遊泳を楽しんでいるので、おもわず退散である。

「鋸岬」の東方面に砂浜ではないが、いいポイントを見つけたので何とか上陸する。潜る準備をしていると、何処からともなく監視船の

が目に付き始めた。ここらは我々素人の目から見てもアワビやサザエがいそうだとわかる所である。

鎌のように飛び出した「鋸岬」を回り込んで素晴らしい景



旗をたなびかせた漁師がやって来た。

漁師>>「この辺一帯は禁漁区でサザエ・アワビは取ってはダメだ！」

私>>>「わかった。じゃあ魚は捕ってもいいのか？」

漁師>>「水中銃を使ったらダメだ！」

私>>>「銃じゃない、鉈や！」

なんともはや難しいところである。今までこんな事をくどくどと言われた事は一度も無いのに・・・、困ったものである。よく聞くとサザエを50万個、アワビを20万個を稚貝の時に放流しているのだと言っていた。また、悪い人間がそれを根こそぎに取り尽くして商売にでもしているのだろう、そんな人間のために我々自然派人間にとってはえらい迷惑である。

この海中は今までの海中と違って急に深みがあり大きな魚がやたらと目に付くので、今回の漁は



アワビやサザエは加藤氏に任せて、私はもっぱら魚突きに高じた。まず手始めに加藤氏の目の前で「タイ」を一突きした。10匹ほどは突いたのだが、逃げられてしまい、結局あとは石鯛2枚のみであった。しかし、魚を追いかけているとついつい深さを忘れてしまって、息が苦しいと思って海面を見上げると7~8mは上にあるので急いでフィンをバタつかせると、足がつりそうになり散々であった。溺れるときはこういった悪条件が重なっていくのだろう、我を忘れての深追いは禁物である。

約2時間くらいは潜っていたらどうか?、陸に上がると脳が酸欠になったのか、三半規管が機能不足になったのか足下がふらふらである。

加藤氏は「アワビは全然見つからない。」と言って大きいサザエを5個ほど取っていたので早速に昼食のおかずにも刺身になった。魚は調味料が無いので持ち帰りである。帰ってから食卓に並んだのは言うまでもない、鯛は煮付けで石鯛は塩焼きである。



鎧浜に15時に帰廷するがここからの片道3時間の帰宅への道中のほうがよっぽどに疲れるのである。たかだか140kmの片道なのに・・・。

さあ、次の第三回ツアーは
何処へ漕ぎ出そうか・・・

